



森と海の自然科

2020年11月18日

春日奥山原始林ハイキング(報告書)

日時：2020年11月12日(木) 10時 近鉄奈良駅集合

参加者： 25名

10時8分のループバスに乗車。春日大社本殿前下車。鹿が嫌いな植物の“なぎ”を見学し、若草山を目指し出発。水谷神社にあるイブキ(内部に杉が生息している)もチェック。

12時：342mの若草山到着。晴天、風なし、暖かいと三拍子揃って全員ご機嫌で集合写真

12時30分 奥山原始林探索組と、奈良公園まったり散策組(4名)に分かれて行動開始。

13時40分：鶯の滝はスキップし、大原橋芳山交番所を経て石窟仏*に到着。

*平安時代後期に、凝灰岩に掘られた東西2つの石窟で、右側の東窟には地藏菩薩立像4体と天部像1体が、東の壁には観音菩薩立像が3体と天部像が1体。西窟には、阿弥陀如来、不空成就如来、大日如来坐像3体、さらにその横におそらく宝生如来が刻まれていたようだ。

14時：首切り地藏*着 *鎌倉時代の作、首と胴体部分が2つに割れ分離している。

その後柳生街道ー春日山と高円山間の谷川沿いに奈良の町と柳生を結ぶ近道として開かれた。石の敷き詰めた歩きにくい道一をもくもくと進み、

朝日観音：鎌倉中期に花崗岩に彫られた。中央に弥勒菩薩、左右に地藏菩薩。さし昇る朝日に真っ先に照らされるのが名前の由来といわれている。

夕日観音：鎌倉中期に花崗岩に彫られた弥勒摩崖仏。 寝仏など観察し破石バス停へ。

15時30分：バスにて近鉄奈良駅到着。解散



<考察>

前回からの“鹿”シリーズです。

1957年に奈良市一円の鹿が、<奈良のシカ>として国の天然記念物に指定された。しかも<奈良のシカ>は野生動物であり、所有者はいない。さらに鹿と人との関係には長い歴史の変遷が存在する。—以下は奈良のシカについて

歴史：767年春日神社が創建され、主神の建御雷命が白鹿に乗ってきたとされ、神鹿と尊ばれるようになった。その後も過度に保護され、鹿を傷つけると厳罰に処される時代が江戸時代まで続いた。だが1670年から幕府は極端な神鹿保護から嚴重な動物保護へと方針を転換した。その一環として、鹿の角伐が開始された。明治時代になると農作物被害に対して放し飼いを禁止する方針が打ち出された。その後周辺住民との軋轢で増減を繰り返したが、終戦後は食料難による密猟などで79頭にまで減少した。社会の安定とともに増加し1000頭程度に安定する。

共存への道：奈良のシカは2020年現在では1286頭。シカの食事は1日3~5kg以上、主食はイネ科植物、ササ、木の実、ドングリなど。奈良の鹿は絶えず栄養不良だが、保護されていることで長生きするという微妙なバランスの中で生息している。一般の野生鹿より体格は小さいし、骨髄の色の検査でも栄養不足を示している。ただ人の与える鹿せんべいはあくまでもおやつであり、自然の餌であるシバや、草やドングリも集めるには限界があり、シカの食料問題は未解決のままである。

奈良での農作物をめぐる鹿との攻防は江戸時代から続いてきたが、昭和の終わりから鹿による農業被害が広域にひろがり始め、イネ被害のほか柿、シイタケ、茶など多種類に被害が生じ、地元の農民からの強い要求もあり、奈良県は奈良公園から離れた地域の鹿を保護対象外とする方針変更を2016年に行った。

奈良以外のシカに対する政府の方針：環境省と農林水産省は、ニホンジカが急速に増加し、生態系や農業などに深刻な被害を与えているとして、2013年にニホンジカの個体数を2023年までに半減させる10年計画を策定し、2014年に鳥獣保護法の改正を行い、シカなどの積極的捕獲の促進、管理を行う鳥獣保護管理法へと変更した。その目的のために都道府県に交付金をだしている。→しかし具体的な効果的な方法は見つからず、鹿の天敵（狼）も存在せず、猟師数も減少するなかで成果は上がっていない。

前回訪れた大台ヶ原の惨状は、もちろんシカの食害が主原因だが、もとはといえば、昭和25年ぐらいから森林伐採が大規模になり、草地の増加が始まり、鹿が増加したことが引き金である。日本から天敵である狼を絶滅させたのもわれわれ人間である。

野生動物管理とは、自然資源の一部である野生動物を、健全な生態系を維持するために人間が自然と共生しながら模索するものであり、一方的に人間が管理するものであってはならないと感じた。